

エドキンスの漢語音韻史研究

中村雅之

1. エドキンス(J. Edkins 1823-1905)の業績

中国語の通時的および共時的研究に関して、19世紀半ばにエドキンスの到達していた水準は他の研究者を大きく引き離すものであった。20世紀前半にカールグレン(B. Karlgren)やマスペロ(H. Maspero)が現れるまでは、誰一人その水準に近づくことは出来なかったし、彼ら二人にしても、漢語研究という分野に限ればエドキンスのなした仕事のごく一部分の研究を進めたに過ぎない。

エドキンスの業績の第一は、近代的な漢語方言研究の基礎を確立したことである。上海語の詳細な記述をしたほか、初めて官話方言を地理的に分類した。第二は、19世紀半ばまで大きな影響力のあった官話(=広義の南京官話)の総合的な研究と記述をおこなったことである。代表的な著作に『官話文法(Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect. Shanghai, 1857)』がある。第三は、漢語音韻史の研究方法についての大略を示したことである。1853年に『王立アジア協会中国支部紀要(Transactions of the China Branch of the Royal Asiatic Society. Hongkong)』に載せた「古漢語の発音(Ancient Chinese Pronunciation)」は総合的な漢語音韻史研究として記念碑的論文と言うべきものであるが、一般的にはほとんど認知されていないようである。そこで以下に内容の一部を紹介し、その業績を顕彰したいと思う。

2. 「古漢語の発音(Ancient Chinese Pronunciation)」(1853)

この論文は全35頁に及び、PartとPartに分かれる。Partでは、「形声字」、「詩経の押韻」、「中世の詩と字書」、「仏典中の梵漢対音」をそれぞれ論じ、Partでは朝鮮・日本・ベトナムの漢字音と現代諸方言から古音を探っている。つまり、カールグレンが漢語音韻史を組み立てるのに使用した材料のほとんどは、すでにエドキンスによって扱われているのである。エドキンスに足りなかったものは宋代の韻図であり、韻図の利用こそがカールグレンの研究を精緻なものにしたと言ってよい。

(i) 古音の区分

エドキンスの述べる所には現在から見ても興味深い点がいくつかある。まず、形声字の声符から帰納される体系と、詩経の押韻から帰納される体系を同一視していないことである。清朝の考証学者たちが上古音の体系を組み立てるのに声符と詩経の押韻を同様の比重で利用したのは大いに異なる。エドキンスは声符から得られる体系を周代よりもずっと古い時代に想定している。

()声調

声調についての記述も面白い。エドキンズによれば、原初には声調は長調と短調の二種だった可能性があるが、少なくとも周代には平・上・入の三種であった。漢代になると上声の一部と入声の一部が新たに去声という声調を形成し始めた。この変化が完成すると、他の声調に比べて平声だけが数が多いことになり、そのバランスを取るために、唐代より後の時代に平声から第五の声調(=陽平声)が生まれた。この新たな声調においては旧全濁音は全て有気音になった。以上が彼の声調論であるが、最後の部分、すなわち新たに生まれた声調において旧全濁音が有気音になったというのは、非常に興味を引く発想である。旧全濁音が無声化する際に、多くの方言では平声で有気音に、仄声で無気音になるが、その理由については今なお定説がない。エドキンズの着想は考慮に値する。

()口語語彙の保守性

エドキンズは口語音が文語音よりも古い特徴を保存していると考えていたが、南京官話で「-o」となる音節(=果撮一等)についても、その考えを適用している。朝鮮・日本・ベトナムの漢字音、および梵漢対音から、「可」や「多」などの古音は「-a」であったが、ごく口語的な語については官話でも「-o」とならず「-a」となるとし、「阿」「那」「他」などを挙げている。

3.まとめ

カールグレン以後の研究を知っている我々の目から見れば、エドキンズの研究にはもちろん粗雑な部分もある。しかし、漢語音韻史に対する基本的な視点は我々のそれとほとんど変わるところはないし、何よりも19世紀半ばという時代(日本はまだ江戸時代である)を考えれば、利用した材料の豊富さにただ唖然とするばかりである。清朝の考証学者や西欧の学者の成果を取り入れたばかりでなく、自ら採集した方言データなども加えて、漢語音韻史研究の進むべき道を示したのである。この分野のエドキンズの業績に対して、正当な評価が与えられることを願う。